

「マスター・サイエンス」を軸に、学際的に環境問題に迫る

環境問題と大学

環境問題は、人類が直面している最も重要な課題の一つであり、その解決に向けた教育・研究の進展が、社会的に強く求められている。

最近では、環境問題を学び、研究できる大学も多い。「環境学」や「環境科学」を冠する研究科（大学院）だけでも、私が所属している名古屋大学環境学研究科を含めて、二十以上あるのではないだろうか。（もちろん専攻・コースレベルではさらに多い）。

環境学って？

それでは、環境学とはなんだろうか？実は、環境学という独立した学問分野（ディシプリン）は存在しない。環境学とは、既存の「○○学」が集まって環境問題に取り組み、学際的な領域なのである。

例えば私の研究科は、地球科学や工学等の理系と、社会科学系によって構成されており、各分野に軸足を置きながら、広く環境について考えられるようになっていく。

政治学と環境学

環境学というと、自然環境を科学的に評価し、技術的な改善策を考えるとといった、理系に近い分野を想像するかもしれない。しかし、なぜ文系を含めた学際的アプローチが採られているのだろうか。

私の専門である政治学の観点から、（自然）科学だけでは環境問題を解決できない理由を、自分が実際に調査した事例に沿って考えてみたい。

まず「政治」とは、公共の事柄について、皆が納得する形で様々な価値を配分し、衝突を避ける取り組みである。政治学とはその「社会に対する諸価値の権威的配分（分配）」が、現実社会でどのように行われているか分析し、どうあるべきかを考える学問である。

これを踏まえて考えると、環境問題が政治的な問題であることが見えてくる。

環境は多様な価値を持つため、種々の要求がなされる。例えば森林には、林産物としての経済的価値だけではなく、土壌保全・炭素固定・水源涵養などの環境的機能や、地域の文化を支える役割もあり、どの価値を重視するかで意見が対立することも多い（写真1参照）。野生生物に対する価値観も多様であり、例えばクジラを神聖視する一部の人は、クジラの資源量についての科学的知見に関わらず捕鯨に反対するため、漁民との摩擦が起きている（写真3参照）。こうした状況では、森林やクジラの扱いについて「正しい」判断を科学的に導くことは不可能であり、衝突が起きないように調停する取り組み（＝政治）が必要となる。

また、科学が進歩しても、複雑な自然環境の理解には限界があるが、そのような状況でも利害を調整し、適切な意思決定をする必要がある（写真4・5参照）。更に、関係者間に政治力の差が大きい

写真1（右）：インドネシア・中部ジャワのアグロフォレストリー。熱帯林とともに暮らしている人々は、森林を単なる木材源としてだけでなく、地域の生活や文化に即して、多様な形で活用している。（手前に見えるのはコーヒーの木。）

コミュニティ固有の価値観に基づく森林管理は、利潤を最大化するために国が科学的に策定する、トップダウン型の森林政策（高く売れる樹種を重視する）とは相反することも多く、科学的にベストな解が必ずしも社会的にはベストな策ではないことを示している。



写真2（左）：インドネシア・北スマトラの、パルプ・レーヨン工場における木材チップの山。パルプやレーヨンの生産過程では大量の薬品が使われる。この工場は、住民の反対にもかかわらず、権力者やメディアを通じて、「科学的にみて環境に悪影響はない」という主張を優位に展開し、操業を開始したが、大気汚染や水質汚濁、森林破壊等の問題を引き起こした。

途上国では、国や大企業と地域住民（特に農民・漁民）などの間に、科学的能力に大きな差があるため、科学的議論が権力者の利益に沿う形で形作られることも多い。



Ko Nomura

●1973年東京都生まれ。英国ウォーリック大学大学院修了（PhD）。研究機関などを経て、09年より現職。専門は政治学、環境学。



写真3 (左上): 和歌山県太地町にあるクジラの骨でできた鳥居。太地の沿岸捕鯨は、クジラを特別視する海外の環境団体から強く非難されているが、自然保護を考える場合には、一元的な見方や科学的な議論だけではなく、その地域における文化的・社会的意味についても配慮しないと、真の問題解決にはならない。



写真4 (右上): キリバスで最も標高が高い地点 (海拔 2m 程度)。キリバスはツバル等とともに、温暖化で「沈む」と言われる太平洋の小国である。科学的限界から、どれだけ海水面が上昇し、気候が変動するのは意見が分かれるが、一時的にでも海水が浸水する状況になれば作物は育たなくなり、人間の生活は難しくなる。科学的に不確実な状況でも、こうした地域を支援し、対策を急ぐことが望まれるが、負担を担うべき先進国の動きは鈍い。

写真5 (右下): 海水が入ってきたために枯れたヤシの木 (キリバス)。

と、科学が強者の価値観に沿って形作られ、弱者が環境被害にあうことも多い (写真2参照)。
このように、環境問題に取り組むには、科学だけでは不十分であり、政治学的な見方が必要であることがわかるだろう。

環境学と学際性

環境問題の原因は人間の活動であり、環境問題は社会に様々な影響を与える。したがって、思想や制度、文化などの面から社会の在り方を問い直す必要があるため、環境学には政治学だけでなく、広く人文・社会科学のアプローチが必要になる。そして、自然科学を含めてこれらの研究が無関係に進んでいては問題の解決に至らないため、学際的な取り組みが求められるのである。

このように考えると環境学は、諸学問を総動員して人類的な課題に取り組む、学術のフロンティアにいる分野だと言いうことができる。興味のある人は、ぜひ志してもらいたい。

政治学への誘い

ところで、政治学的考察が重要な分野は、環境だけではない。細分化された専門知の中を生きるあらゆる科学者にとって、自らの知識を学際的に発展させ、公益に結びつけるために、政治学は大きな意味を持つ。

ヒュームに従えば、「である」ことから「べきである」という価値判断は導けない。科学者が新たな事実(である)を発見しても、それが社会にとってどのような価値があり、どう役立っていく「べき」かは、改めて考えていかななくてはならない。専門分化が進むにつれて、科学が我々のより善い生活にどのように貢献できるのか、その方向性を示す学問が一層重要になる。

ハーバード大学の政治学教授、マイケル・サンデルの本『これから正義の話をしよう』等^{*}や講義「ハーバード白熱教室」が日本でも評判になったのは、世の中の専門分化された知をつなぎ、その価値づけを行うために政治哲学が求められていることを示唆しているのかもしれない。

^{*}

丸山真男は、日本の学問を、それぞれの分野が孤立した「タコソボ型」と評し、学際的な議論を妨げていると論じた。そしてその一因として、欧米で学問の専門化が進んだ十九世紀後半に、日本が近代科学をそのまま輸入した点を指摘している。

同時に丸山は、欧米には古代ギリシャより続く哲学・思想的基盤があるため、専門分化が進んでも、異分野交流の共通の土台が存在するとして、日本との違いを述べている。

そのような哲学・思想的基盤の中でも重要なものの一つが、政治学(政治哲学)である。アリストテレスは、政治学を、「マスター・サイエンス」と呼んだ。他の分野の知識を総合的に結び付け、より善い生き方・社会の追及に活かしていくような、諸学を統べる役割を担う学問として、政治学をみていたからである。

これらの論に従えば、わが国で学際的な研究を進める上で、政治学(特に政治哲学)が重要な役割を占めるといえるだろう。

^{*}

以上、学際性という観点から、自分の専門の意義を、(大分強調して)述べてきた。どのような分野であれ、これから大学(院)に進む人が少しでも多く、政治学や環境学に興味をもってもらえればと思う。